

■ オープンソースサロンについて

・第45回オープンソースサロン（2009年11月20日（金））

最初に、松江商業高等学校の沼田愛氏と島根大学の野田哲夫氏による「韓国OSS視察ツアー報告」という発表がありました。韓国でも国の機関でOSSを活用する取り組みが行われており、松江市や島根県、IPAなどの活動に関心を持っているとの報告がありました。

次に、しまねOSS協議会の丹生晃隆氏による「松江をIncubation Cityに！—松江オープンソース活用ビジネスプランコンテスト2010の紹介—」という発表がありました。今年で2回目となったビジネスプランコンテストに関する説明の他に、応募のコツなどについて解説されました。

最後に、NPO法人プロジェクトゆうあいの三輪利春氏による「視覚障がい者と情報化」という発表がありました。三輪氏は交通事故で失明された後、パソコンで自立し社会参加をされています。今回は実際に使われている時計・携帯電話・パソコンなどの実演をしていただきました。このようなツールの機能向上に加え、情報提供側がアクセシビリティを十分に考慮することの必要性を感じました。

・第46回オープンソースサロン（2009年12月4日（金））

今回は、Rubyライブラリの「dRuby」作者の関将俊氏による「dRubyと私- 西那須野公民館への道」という発表および実演が行われました。前半では関氏を中心となって開催されている「とちぎRubyの勉強会／toRuby」の取り組みについて紹介されました。後半では参加者と共にdRubyを使ったプログラムの実演が行われました。参加者がプログラムを入力し、動作させることでかなり盛り上がりました。今後もこのような実演（演習？）のサロンが開催できると面白いなと思いました。

・第47回オープンソースサロン（2010年1月22日（金））

最初に、小松電機産業株式会社の田辺勉氏による「Rubyを利用した上下水道施設監視システム（水神）について」という発表がありました。開発当初、設計にRuby開発者のまつもとゆきひろ氏が参加していたことや、当時としては新しいエクストリーム・プログラミング（XP）の手法を取り入れたことなど、大変興味深い開発秘話をお聞きすることができました。

次に、日本ユニシス株式会社の羽田昭裕氏による「エンタープライズアプリケーションとRuby」という発表がありました。エンタープライズアプリケーションには品質管理が求められ、これが「Rubyらしさ」と矛盾することが指摘されました。この問題を含め、様々な問題を解決しながらRubyがエンタープライズ分野へ広がっていけば良いなと思いました。

オープンソースサロンは毎月1回のペースで開催しています。開催日程はしまねOSS協議会のウェブサイトに随時掲載しています。参加の事前の申し込みは必要ありません。当日会場まで御気軽にお越しください。ご来場をお待ちしております。（黒谷）

■ しまね情報分野 研究シーズ発表会について

2010年2月18日に、くにびきメッセにおいて「しまね情報分野 研究シーズ発表会」が開催されました。産学官連携や研究シーズ発表については、様々なイベントが行われていますが、情報分野に特化した発表会は今回が初めての開催でした。島根大学、松江高専、島根県、財団法人しまね産業振興財団、以上4機関が主催し、しまねOSS協議会も松江市や島根県情報産業協会とともに後援致しました。

大学や高専等、教育研究機関は、「新しい技術や知識を生み出していく」という点からも、地域産業振興において重要な役割を担っています。まずは、大学や高専がどのような研究を行っているのか、産業界の人達に知っていただく、そのための「場」づくりをしよう、というのが今回の開催の狙いでした。当方も数年前から温めていた企画であり、今回の開催は喜びもひとしおでした。一緒にご担当をいただいた、杉原さん、安田さんにもこの場を借りて御礼申し上げます。

開催当日は、大学と高専から計8の研究発表、計20のパネル展示を行い、合計90名の方々にご来場をいただきました。「今度は研究室を訪問したい」「一緒に何かできそう」といった感想もいただき、我々担当サイドも、今後将来の共同研究等への発展可能性に大きな自信も得ました。今回の発表会を通じて、また新たな連携が生まれてくることを祈っております（&そのためのサポートもしていきます！）。（丹生）

■ 編者後記

今回は記事が盛りだくさんで、いつもより紙面の文字サイズが小さくなってしまいました。多少読みづらく感じられる方もおられるかもしれませんが、それは同時に島根県内におけるオープンソースへの関心の高まりでもあると感じていただければと思います。

このニュースレターはOpenOffice.orgで作られています。



第六号(2010.03.08)



■ 松江オープンソース活用 ビジネスプランコンテストの結果について

今回で2回目となる『松江オープンソース活用ビジネスプランコンテスト』の最終審査会が2月19日（金）に松江テルサで開催されました。

全国からビジネス活用部門へ8件、学生部門へ17件の応募があり、その中から書類選考を勝ち抜いた各部門4組のみならず、またビジネスプランの発表をいただきました。日常生活からヒントを得たプランや、社会問題に対応するプランまで様々な発表がありました。

注目の質疑応答の時間では、審査委員さんからの鋭い質問がありましたが、発表者のみなさんは、明るく楽しく元気よく答えられていました。

ビジネス活用部門の最優秀賞は、日本酒をにぎわす会の『日本酒ポジショニングマップ(SAKEポジ)製作』が、学生部門の最優秀賞は、松江高専情報工学科の川上さん・福岡さんの『当直ドクターなび～時間外救急医療お助けシステム～』が受賞しました。

審査会には、松江商業高校の1年生が見学に来場され、会場を盛り上げてくれました。

今回発表があったプランが、少しずつでも実現に向かうことを期待しています。（川上）

■ Matsue.rbについて

みなさんこんにちは、島根県松江市を拠点に活動しているRubyコミュニティ『Matsue.rb（まつえるびー）』の高尾宏治です。今回は、2009年11月28日に松江テルサ別館2Fのオープンソースラボにて開催した「第13回Ruby勉強会 in 松江」についてレポートします。

まずは、参加者全員で自己紹介をしてから昼食を取り交流を深めました。

そして、株式会社万葉 大場様の「現場で役立つRuby on Railsパターン」という発表を聞きました。とても実践的な内容でしたので、普段からRubyを仕事で使っている参加者から「大変ためになった。もっと詳しく聞きたい。」といった声が上がっていました。

続いては、持ち時間15分のLT（ライトニングトーク）でした。詳細は割愛しますが、発表者とタイトルを次に挙げておきます。

1. katoさん『絵本作成アプリケーション（作成中）』
2. 大場さん『Ruby界最強のTwitterクライアント“Termtter”を生み出すパワー』
3. 安田さん『耳で楽しむ文学作品』
4. 大場夫妻、まつもとさん『RubyConf2009レポート』

この日の勉強会には25名の方に参加いただきました。ありがとうございます。

発表内容を録画したものが、松江SNSのMatsue.rbコミュニティにあるリンク先にて閲覧できますので、参加できなかった方はぜひご覧ください。

http://matsuesns.jp/bbs/bbs_list.php?root_key=5619&bbs_id=80

参加された皆さまの意見をお聞きしながら、今後もMatsue.rbの活動を続けていきますので、興味を持たれた方はまずは松江SNSのMatsue.rbコミュニティにご参加ください。そして、Matsue.rbが主催するイベントでお会いしましょう。（高尾）

■ 松江Ruby会議02について

日本のRubyコミュニティの一大イベントは、年に一度首都圏で開催されるRuby Kaigiですが、各地方でのRubyの普及、Rubyコミュニティの活発化を受けて昨年度から地域Ruby会議が全国各地で開催されています。

Rubyのメッカである松江でも昨年に続き、2月13日(土)に松江Ruby会議02が松江テルサで開催されました。今年のテーマは「競」で、Rubyに関するプログラミングと発表により参加者同士が競ってお互いを高めるといったコンセプトで、地元の企業(いずれもトータルネット株式会社、株式会社エスティック)、島根大学でのRubyによる実装、活用事例が報告されました。また、九州大学にてWebを利用した教員データベースをRailsで開発した事例が紹介され、地域同士、大学同士のRubyを通じた連携も展望できました。

そして、松江の地の利は、やはり「まつもと」さん。スピーチ「やさしいMatzの作り方」は、まつもとのRuby以外の取組みを紹介した「貴重」な報告でした。

会場にはRubyユーザを中心に74名が参加し、同時中継されたUstreamには多数の視聴と書き込みがありました。松江テルサのRuby色のライトアップとともに、Ruby色に熱く染まった一日でした。

こういったイベントが成功するのもMatsue.rbを中心とした地元のエンジニアの地道な勉強会の積み重ねがあつてこそだと思います。今後も継続して、来年もまた松江Ruby会議03、そして04、05と開催されることを願ってやみません。(野田)

■ 韓国OSS事情視察ツアーについて

11月2日午前11時に、OS4から3名、韓国OSS研究の第一人者である徳成女子大学の李先生を合わせた4名で情報社会振興院へ伺いました。先方は韓国電子政府に関するプロジェクトの中心である情報社会振興院(以下、NIA)から2名、ICT産業の振興とOSSの調査・研究を担当する情報通信産業振興院(以下、NIPA)から1名、韓国のIT企業であるUengineから3名の計6名の皆さんに対応いただきました。

韓国では2年前からNIPAによりOSSへの積極的なサポートが開始されています。企業支援やコンテストの実施を行う中で、コミュニティから誕生した企業がUengineであり、J2EE、Apache、Tomcatで開発されたLGPLライセンスの「uEngine BPM」という企業総合マネジメントシステムソフトが韓国での利用実績を伸ばしています。

2001年から韓国電子政府プロジェクトが始動しており、訪問当時の進捗状況は電子政府の横断的な対応をするため、政府電算センターで各省のデータをすべて収集中で、クラウドなどといった技術的な段階よりもっと前の、物理的な統合と仮想化の段階でした。これと同時にすべての省庁で利用できる共通コンポーネントとフレームワークの開発も進められていました(一番多く使われているフレームワークはJ2EEによって作られているそうです)。こうして出来上がったフレームワークはオープン化され、民間での利用促進が期待されています。そのために、NIAでは公官庁発注の取引においてこのフレームワークを利用することを仕様に入れたり、NIPAでは利用者を増やすための人材教育を2008年から実施したりと、様々な対策が行われています。

同日夕方に、延世大学にて韓国のRubyコミュニティの中心的役割を担うパクさんのお話を伺いました。韓国でもRubyの愛好者によるコミュニティ主催の勉強会を開催する活動などが徐々に広がっているということでした。

2か所の視察で感じたことは、韓国ではOSSの価値がコミュニティレベルだけでなく、国家レベルでも重要視されていることです。そのため、Rubyを地域資源として様々な取り組みを行っている島根県、松江市について大いに興味を持っておられました。熱心に質問される皆さんと、その質問に答え、熱く語っておられる野田先生に今後のOSSの光を見たような気がしました。(沼田)

■ 会員企業紹介(第2回)

ファーエンドテクノロジー株式会社
代表取締役社長 前田 剛 様
(インタビュアー 沼田)

– 日本のRedmine導入の第一人者である前田社長、Redmineに出会ったきっかけを教えてください。

以前勤めていた企業にて当時利用していたTracというソフトウェアが業務に合わない部分が多く、より使い易いシステムは無いかと探しRedmineに出会いました。RedmineはRuby on Rails上で動作するので、仮に不便な点が出てきたとしても、自分でカスタマイズできると思い、社内で導入してみることにしました。

採用を決定した当初、フランスで開発されたRedmineについての情報を主に英語のサイトから得ていたため、日本語で情報をまとめたWebサイトがあれば便利だと考え2007年10月から日本語情報サイト「Redmine.JP」を立ち上げ、後に2冊の本を執筆することにもつながりました。



– Redmineを利用してみて、どんな点が良かったのですか？

以前Tracというシステムを試していました。これもそれなりに使えるシステムですが、小さなプロジェクトを多く抱える企業としては、1つのプロジェクトに1つのTracが必要となるため、複数のTracを設定しなければなりません。Redmineでは、複数のプロジェクトを1つのRedmineで管理できることと、Webベースで利用できるところが、魅力的でした。

– 2009年9月に提供開始されたサービス、「My Redmine」について詳しく教えてください。

Redmineを社内のサーバにインストールし、利用するのは簡単です。実際に私も初めて社内で導入した時、上手く行きました。

しかし、複数の企業同士で共通のプロジェクトを進めようとするRedmineが使えず、Excelで表を作ったり、メールでコードを送信するなど、管理方法のレベルをどうしても下げざるを得ませんでした。また、自分が行っている作業は本当に最新のものに対して行っていることなのか、常に不安に感じつつ作業をしなければなりません。

社内での快適な環境を企業間のプロジェクトにおいて提供するホスティングサービスを必要とする人がきつといると考え、この「My Redmine」を開発しました。

クラウド利用の普及も、サービス提供の追い風になりました。当社のように規模の小さい企業にとってはサーバ機器を自社で保有することや他社のデータセンターを利用することは負担が大きいと、現在は比較的安価なAmazonのサービスを利用しています。

2009年9月からの正式サービス開始の前に約一年間、百数十件のお客様に対して無料試用サービスを展開し、お客様ニーズに合わせたサービス改善につなげてきました。現在は関東地方の企業を中心に採用いただいています。

– 新たなサービスを展開していく過程でのご苦労や今後の課題などはありますか？

需要の掘り起こし、顧客獲得が課題です。当初Web広告などを試みましたがあまり反応が良くありませんでした。現在は新たな取り組みとして、今年1月1日からRedmineの最新情報や便利な使い方などを紹介する「Redmine.JP Blog」を立ち上げたところ、1か月無料試用の申し込み数が増えました。今後はサービスをより知ってもらうため、県外企業へのDM送付も考えています。

次に、お客様が持っている情報を社外へ置くことへの不安感をどう拭うかということが課題です。セキュリティ対策やサポートが充実しているとは言え、日本国外に存在するデータセンターを利用していることから、採用を躊躇している企業もあるようです。

– 豊富な専門知識と高い技術力で独立された前田社長ですが、ソフトウェア分野に進んだ人生の分岐点はどこだったのでしょうか。

小学校高学年の頃、世の中ではマイコンブームが到来していて、学研の化学やパソコン関係の本を読み始めました。実際にコンピュータに触れたのは、高校でコンピュータ部に所属してからで、BASICやC言語でプログラミングをしました。

大学を中退後、大阪で2年間専門学校に通った後にソフトウェア開発を行う会社に入社しました。今思うと、大学をきちんと卒業していたら、今ここで仕事はしていないかも知れません。この頃が分岐点だったのではないのでしょうか。

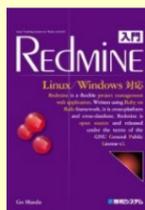
– では最後に、これからファーエンドテクノロジーが目指していくものやOSSに対する思いを聞かせてください。

RedmineなどのOSSやIT技術で、世の中を変えるきっかけを作り出したいと思っています。私の力だけで世の中を変えることは難しいかもしれませんが、My Redmineなどのサービス提供を通じて企業間の活動を円滑化し生産性を高めるなど、誰かが世の中を変える際の手助けができれば嬉しいです。

OSSに着目した理由は、『それが使えるから』という単純な理由からです。OSSは他のソフトやクラウド技術、私たちの労力と組み合わせることによって、より良い使いこなしの可能性が広がります。

私はよく、OSSの利用を雨水と水道水の関係に例えます。私たちはコックを捻れば蛇口から水が出てくることを当たり前だと思っています。その水はもともとは雨水であり、無料です。その雨水が清潔にされ、蛇口から提供されるという付加価値に対して水道料金を支払っています。雨水が溜まったところから直接水を汲む人、蛇口からの水の供給を望む人、ペットボトルに詰めたものが欲しい人など、同じ「水を手に入れる」段階までに、必要とするサービスレベルにはギャップがあります。そのギャップを見つけ、埋める方法を考えることが新たなビジネスになるわけです。OSSもお客様が必要とするサービスレベルに合った付加価値を加え、ギャップを埋めることでビジネスを創出します。

いかにギャップを上手く探して突いていくかが、大切ではないでしょうか。



日本初のRedmine入門書！
「入門Redmine Linux/Windows対応」
前田 剛 著
2008年11月発売
226ページ 2,100円 出版社 秀和システム



〒690-0816
松江城北陵町1番地
テクノアークしまね3階
TEL. 0852-21-0460
http://www.farend.co.jp/

2008年9月9日設立。
2009年3月に現在の所在地に移転。
従来からのソフトウェア開発やサーバメンテナンス事業の他、同年5月からはRadiant CMSホスティングサービス、9月からはRedmine+Subversionホスティングサービス「My Redmine」を提供開始。
高い技術力と専門性を有し、今後の活躍が期待される企業。